

# 国語

## 注 意

1. 問題は全部で15ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その1)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし、マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

### マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する記号・番号の○を塗りつぶしなさい。○で囲んだり×をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が1のとき)

1	<input checked="" type="radio"/>	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
---	----------------------------------	---	---	---	---	---	---	---	---	---

4. 一度記入したマークを消す場合は、消しゴムでよく消すこと。×をつけても消したことになる。
5. 解答用紙をよごしたり、折り曲げたりしないこと。

一次の文章を読んで、後の問に答えよ。

僕たちが「いのち」や「生命」と言っている場面は、たとえば子供が産まれて対面したときの感動や、花や虫を愛<sup>め</sup>でる際の感情だったり、死に接したときの肅然とした気持ちだったり、自分の内面の動きや情動的な側面と不可分ですよね。つまり、生命は「感じるもの」あるいは「感得するもの」です。

つまり対象と自分がどう向き合うかという交差路の中に、「生命」という位相を見出す場面が多いのではないのでしょうか。それをめぐって人間は古来、いろいろな生命観を育んできたと思います。

これに対して、生物学が生命を見る視点は、分野ごとに一様ではありませんが、基本的な姿勢としては、できるだけ主観的な印象を排除して、「客体としての生き物」を記述することに特化したスタンスだと思っています。

ですから、生物学は、実在的な対象としての「生き物」「生命体」を扱っているのに対して、対象と感得者の関係性としての「生命」は、どちらかという<sup>1</sup>と芸術や文学など、あるいはその他もろもろの場面で扱われてきたように思われます。

**A**、生命科学の視座も、実はそれほど単純に「生命」を客観化し得てはいないのではないか、という可能性がります。生命科学の内部に、合理的・自然科学化された主観性あるいは擬人性が抱えられてはいないだろうか、**B**、生命科学の研究者自身が「生命に接したときの情動性」を擬似的に喚起するような<sup>2</sup>アニメイズムの雰囲気<sup>3</sup>が、とても薄められた形で、しかし非常に広範に繰り込まれているのではないかと僕は考えています。

とはいえ、もちろん僕は、生命科学が単にほかの文化活動や思弁的な活動と同じだと言っているわけではありません。言うまでもなく、生命科学の素晴らしいところは、通常の生活範囲をはるかに超える時間的・空間的スケールで、生物の営みや、ミクロな世界をつまびらかにし、知の地平を大きく拡張してきたことにあります。

しかし、そういったことも含めて、生物学自体を、「生命を語る長い文化史・思想史の中の一部」と位置づけてみることは重要

だと思えます。なぜでしょうか。

情動的生命観と、一見客観的な生命科学は、「前時代的な思想」と「それを克服し、塗り替えた見方」として単純に語れるものではないからです。分子生物学的生命像が広まってもなお、僕たちの生活や文化にとって「素朴な情動的な生命感覚」はきわめて切実に感じられるし、場合によってはあらゆる価値基準に優先するほどに重用されているからです。

おそらく、どんな厳格な生物学者であっても、身内の小さな子供がイキモノに接している時には、彼ら／彼女らに生物と戯れてみることを勧めたり、「可愛いね」とか、「きれいだね」とか言ったりしながらコミュニケーションをとろうとするでしょう。

「生命の情動的概念が、まずもって子供とのコミュニケーションの中で体験として体得・伝達されるような文化」を僕たちが共有しているという現実<sup>4</sup>は、ものすごく重たいことです。けっしてDNAや物質から入るのではないし、言語から入るとも限りません。

こうした生命のありようは、「対象としての生物と、観察者であり当事者である感得者との間で立ち現れるある種の体験的な関係性」と言い替えられるのではないかと思います。そののちに、生命科学は、いったん観察者の立場をカッコづけにすることで「ナマの対象」を客観的に記述・理解しようとする立場ということになるのではないのでしょうか。

いったん自然科学的視座を骨の髄まで体得した熟練の生物学者たちでさえ、僕たちと同様に体験的・情動的生命観をそっくりそのまま共有しつづけていること自体、後者の生命観の根強さと本質性を何より雄弁に物語っていると思えます。

しかし、エッセイはともかく、科学論文にそういう感情が書かれることは基本的にはまったくありません。ですから、研究の表舞台では、生命科学の研究室に起こる悲喜<sup>a</sup>もごもの生命をめぐるアイコンは、二次的に扱われる運命にあります。

でも、「生命とは何か」という問いをより一般的に考え直してみようと思ったら、「僕たちが生命という概念をどのように使っているのか」を問い直すことは不可欠です<sup>5</sup>、特に現代においては「生物学的な概念が、日常的・経験的な生命観とどのようにダイナミックな相互交流をしているのか」は重要な課題です。

ここで、もしかすると多くの方が思い浮かべるかもしれないのは医療現場の話です。確かに、僕たちにとって最も身近な、「生命科学と日常的・情動的生命の交錯の場」に違いありません。臨床の中で、生と死と向き合う科学・技術の不断の研鑽・探究が繰り返されてきたことが、生命観の歴史の本流を形成してきたことに疑いありません。また、まさに科学的生命観と情動的生命観がせめぎ合い、時としてその軋轢がさまざまな倫理的な問題を投げかけてきたのも周知の通りでしょう。医療倫理・生命倫理の問題として語られていることの重さ、深淵は、明らかに「生命とは何か」を考えるうえで中核をなしていると思います。

ただ、生命倫理の課題は、すでに社会問題化したところのみ存在するわけではないはずで、ここでは基礎的な位相での生命像をめぐって、話を続けていきたいと思います。少し別の観点かもしれませんが、ここに書いていることから、生命倫理の課題に通ずる思考は開かれているはずだと思えます。

先に、体験的・情動的生命観を育ててきたのは、イキモノをめぐる親子の間での情動的コミュニケーションであったり、文学や芸術だったりした、という話をしました。ややこしい話ですが、僕は生命科学の記述様式自体もまた、いささか特異な「科学的な、情動的・体的生命観を育むプラットフォーム」として機能している側面がある、と指摘しておきたいと思えます。

たとえば動物細胞を扱っている、とある「ドウリヨウ研究者は、「きれいな細胞」という表現をよくします。「イキイキと見える細胞」が、実際の研究上も有用で、「イケてる細胞」だ、というわけです。

何が言いたいかというと、「自分たちの興味のある研究に対してポジティブな意味のある細胞」を、「きれいな細胞」「イケてる細胞」として選別する鑑賞眼が、専門家の中で養われている、ということなのです。これは、科学者集団の中で非常に重要な意味を持つている文化だと思えます。

「客観的に美しい」「役に立つ」ではなく、「役に立つ」対象を「美しい」「イケてる」とコードしていき、より確実に「使える細胞」を選別する能力を養うというふうで、細胞という学術的な対象に主観的・体験的な美学的価値を与え、その審美眼を同時に養うということが行われている。これは少なくとも文化人類学的には非常に興味深い行動規範ではないでしょうか。先ほどから議論し

ている生命科学の記述様式のアニミズム性とも深層でつながっているとあります。こうしたエピソードは、現代の生命科学・生物学が、生命をめぐる I な営みであることをさらに強く示唆しています。

(岩崎秀雄『生命』とは何だろうか』による)

問一 傍線部1「生物学が生命を見る視点」とあるが、「生物学」の基本的な視点はどのようなものだと筆者は考えているか。それを一語で表す場合に最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 1。

- ① 体験的      ② 主観的      ③ 思弁的      ④ 客観的      ⑤ 審美的

問二 空欄 A と B に入る最適な語をそれぞれ次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 2。

3。

- ① なぜなら      ② そこで      ③ けっして      ④ その上      ⑤ ただし

B

- ① しかし      ② もともと      ③ やはり      ④ さらに      ⑤ つまり

問三 傍線部2「アニミズム的雰囲気」とあるが、この文章ではどのような意味合いで使われているか。最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 4。

- ① 素朴な情動的な生命感覚。  
② DNAや物質から生命を見る視点。  
③ 生命は社会的な問題でもあるという見方。  
④ 学術的な対象に美学的価値を加える立場。  
⑤ 医療倫理・生命倫理の問題を重視する思想。

問四 傍線部3「生物学自体を、「生命を語る長い文化史・思想史の中の一部」と位置づけてみることは重要だと思います」とあるが、「文化」や「思想」の歴史とはどのようなものだと筆者は考えているか。最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は5。

- ① 文学的なものでなければならない。
- ② 常にあまいなものとしてしか記述されない。
- ③ 単純に克服され、改められていくものではない。
- ④ 科学的な進展によつて検証されるべきものである。
- ⑤ 常にあつたものに塗り替えられていくものである。

問五 傍線部4「言語から入るとも限りません」とあるが、ここでは「言語」とはどのような性格を持つものだと筆者は考えているか。最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は6。

- ① 情動的コミュニケーション。
- ② 科学的な客観性を保持するもの。
- ③ エッセイを書くのにふさわしいもの。
- ④ 体験を一度分析し、説明する機能を持つもの。
- ⑤ 生物の営みや、ミクロな世界を追求する手段。

問六 傍線部5「現代においては「生物学的な概念が、日常的・経験的な生命観とどのようにダイナミックな相互交流をしているのか」は重要な課題です」とあるが、それはどうしてか。最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は7。

- ① 人々が持つ日常的・経験的な生命観を生物学が無視する恐れがあるから。
- ② 芸術や文学を生物学として発展させるには、日常的・経験的な生命観を忘れてはならないから。
- ③ 客観的な研究としての生物学から情動的なものを排除するためには、日常的・経験的な生命観を持つことが必要であるから。

④ 生物学が社会問題化されるような医療問題を起こさないためには、まがりなりにも日常的・経験的な生命観を持つ必要があるから。

⑤ 生物学においては「イケてる細胞」を見つけ出す鑑賞眼を養うことが必須で、そのためには、日常的・経験的な生命観を持つ必要があるから。

問七 傍線部6「記述様式」とあるが、ここでは筆者はどのような意味でこの語を使っているか。最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は8。

- ① 書く時に選択する文体。
- ② 文章を書く上での修辞法や比喻。
- ③ 説明や論証の前提としての枠組み。
- ④ 想定される読者によって変える技法。
- ⑤ 文章を分かりやすくするためのレイアウトなどの工夫。

問八 空欄

I

に入る最適な語を次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は

9。

- ① 情動的                      ② 科学的                      ③ 倫理的                      ④ 美学的                      ⑤ 体得的

問九 二重傍線部 a「アイカン」と b「ドウリョウ」を漢字にせよ。解答用紙(その2)を使用。

問十 この文章の趣旨にもっとも合致しているものを次の①～⑤から一つ選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は

10。

- ① 芸術や文学こそ人の「生命観」をもっともよく示している。  
② 人の「生命観」は体験的・情動的な側面を無視しては成り立たない。  
③ 医療倫理・生命倫理を社会問題化した時に、人の「生命観」は正しいものとなる。  
④ 「イケてる細胞」を選別することは、人の「生命観」を理解する上で重要なことである。  
⑤ 通常の生活範囲を超えるスケールで、生物の営みを明らかにしてはじめて、人の「生命観」が生まれる。



二 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

人類文明のこれまでの歴史の諸段階は、大別して〈自然社会〉〈農業社会〉〈工業社会〉という順序で発展してきたが、それ以後言われてきたポスト工業社会(産業社会)あるいは情報化社会は、いずれも過渡的なものであった。それに対して、情報ネットワーク社会は、以前の三つの段階と並ぶような時期的な幅を持ったものである。

過去の三つの段階のうち、自然社会とは考古学でいえばほぼ石器時代に当たっている。この自然社会は、穀物の大量生産方法を確認した農業革命によって、紀元前四〇〇〇年以来、次第に第二段階の農業社会に移行した。そしてこの時期が永い間続いたのちに、動力機械の発明・応用が機械制大工業をもたらした産業革命によって、一八世紀以来、第三段階たる工業社会に移行してきたのである。従来、このような段階説をとるとき、工業社会は二〇世紀の後半までつづき、〈情報化社会〉といわれるものはその一部にすぎないと考えられてきた。

しかし、一九七〇年代末の超LSI(超大規模集積回路)の開発やファイバーの大量伝送の成功を経て、アーヴィン・トフラーが『第三の波』を書き、さまざまなパソコン、ニューメディア、衛星通信などが矢継ぎ早に登場して実用化される八〇年代になると、その社会はもはや工業社会の一部としての情報化社会ではなくなった。こうして、はつきり〈情報ネットワーク社会〉が新しい段階として現われたのである。工業社会と情報ネットワーク社会とは、それぞれを代表する力学機械と情報機械から見ればわかるように、繋がりもあり移行の時期もあつたが、それは、少しも情報ネットワーク社会を独立させてとらえる障害にはならない。

そのことは、人間の脳機能の飛躍的で体系的な外化の進行によつても裏づけられる。脳生理学によれば、脳の機能は系統発生的に古い層をなす大脳周縁系の機能と、新しい層をなす連合性皮質系の機能とに分けられ、前者は本能や情動を、後者は論理的思考や意思決定を司るものとされる。この分け方に即していえば、自然社会とは前者の働きが優位な社会であり、次に農業社

会とは、後者の働きが活発になって前者の働きとバランスがとれるようになった社会である。それらに対して工業社会は、後者の働きが前者の働きを圧倒した社会である。

とはいえ、工業社会の段階では、そのような大脳の連合性皮質系の働きは、ほとんど人間の脳そのものとして働いていたにすぎない。やがてエレクトロニクスの理論や技術によって大きく促進されたコンピュータ機器の発達にしても、コンピュータ(計算機)というその命名自体が示すように、初期の段階ではまだ、連合性皮質系の働きのほんの一部が外化されたにすぎなかった。それに対して情報ネットワーク社会では、連合性皮質系の働きが、次第に高次なものに至るまで体系的・システムの外化されるようになった。いや、さらに、それが系統的に外化されるにつれて、人間の社会生活の多様な在り様から、大脳周縁系の働きまで情報機械として外化することが要求されるようになった。

その結果、未来の情報ネットワーク社会においては、人間と情報機械との(共生関係)のなかで、大脳周縁系皮質の働きと連合性皮質系の働きとの、つまりは宗教・芸術と科学との、AとBとの、新しい統合の可能性も開けてきたのである。そこでは、人間は一方では、地球という母なる大地から飛び立って他の惑星や大規模な宇宙ステーションに住むこともできるようになる反面、他方では、自分の家、自分の一室にあつて世界中のどこの誰とでも簡単に自動通訳つきのテレビ電話などによつて話せるようになるだろう。いや、エレクトロニクスによつて脳と脳とが連結し交信することさえ、あなたがち夢物語ではない。他方、情報ネットワーク社会では、身体的な力や強さは第二義的な意味しか持たなくなるから、身体障害者や高齢者などのハンディキャップも大幅に軽減される可能性があるだろう。

実際には紆余曲折があるにしろ、このような可能性が開けてきたことは明らかである。

では、情報ネットワーク社会が本格化したとき、そこではいったい、どのような基底となる価値が要求されるであろうか。システム化された情報処理技術が高度に発達した段階の情報ネットワーク社会にあつて、特徴的なことは、情報的に個々人が他者や社会や世界に対してかつてなく開かれることである。個々人一人ひとりにとつての選択の自由がきわめて大きくなることであ

る。

だが、可能性としてはそうであっても、実際にみんながその可能性を享受できるとはかぎらない。それどころか、I。したがって、ここでなによりも必要なことは、氾濫する情報に流されず、惑わされないような自己、自己決定できるように底力のある自己を確立することである。ここで自己というのは、無意識を含まないような意識的自我ではなくて、身体性をそなえた自律的な主体である。

しかも、このような自己は、情報のシステムあるいはネットワークを離れてあるのではない。むしろ、その結節点として、地球という生態系のうちに育まれ、成立するものになるだろう。ここに、ネットワークのなかにあつて抽象的な存在になりがちな個々人の、大自然への着地があり、だからこそエコロジーがいつそう切実になるのである。ただし、情報ネットワークは、その使われ方ひとつで、個々人の可能性を開くのではなく、かえつて統一された或る意思決定や共通の感情を押しつけることもある。

デマゴグや独裁者がそれを利用するおそれもある。が、なにも彼らが押しつけなくとも、横並びに同じ意見や感情を相互に強制し合うことだつてありうるのである。したがって、裏側からいえば、高度の情報社会では、個々人の立場は十分に尊重されなければならないし、個々人自身にしても、他人や周囲の者たちと、断じて安易に同化しないようにする必要があるのである。ところで、情報ネットワーク社会が本格化するとき、個々人と会社や地域社会との関係も、少なからず変わってくるだろう。人間活動の空間的・地域的な制約がはるかに弱まつて、行動の自由度がずっと大きくなるからである。それによつて知的な行動の範囲も拡がり、グループ的あるいはボランティア的な小集団を超え、自分の属する会社や地域社会を超えて、他の会社や地域社会と関係を持つこともできるようになるだろう。

そのように行動の範囲と自由とが拡がることは、それ自体としてはいいことである。しかし、そうはいつても、個人はなんらかの拠点あるいは場所を持つことなしには、確固とした存在ではありえない。その場合、有力な拠点になりうるのはまず家庭で

あろうが、その家庭にしても他の集団や組織にしても、〈情報の相〉のもとに否応なしに問いなおされて、変貌せざるをえないだろう。

そのことを、先に述べた〈文明史の諸段階〉の観点から振り返ってみると、次のようになるだろう。まず〔ア〕では、その社会組織は、家族と血縁共同体から成っていた。それが次の〔イ〕になると、そこに古代国家が加わるとともに、血縁共同体が地域共同体に変わって、家族・地域共同体・古代国家の三者がそこでの社会組織となった。それに対して〔ウ〕では、前段階の地域共同体の代わりに職能共同体が生まれるとともに、古代国家が国民国家に変わって、家族・職能共同体・国民国家の三者がそこでの社会組織になった。

では、本格化した〔エ〕では、その社会組織はどのようになるだろうか。世界の歴史的趨勢すうせいいから見て、国民国家やその変形であるさまざまな主権国家は、衛星放送やインターネットなどを含む高度の情報ネットワークによって、国境によって象徴される閉鎖性が大幅に打破されるだろう。そのことは、二〇世紀の八〇年代末以来起きたさまざまな歴史的な出来事をめぐって、つまり、東西ベルリンを隔てていた壁があっけなく消え去る上で、また中国の〈天安門事件〉が世界中につよいショックを与える上で、さらに、〈湾岸戦争〉の実態を知らせる上で、世界の空を駆けめぐった衛星放送や衛星通信がいかに大きな役割を果たしたかを考えればわかるだろう。

国民国家あるいは主権国家そのものは、そんなに急速にはなくならないだろうし、途中ではかえっていろいろとつよい揺り返しもあるだろう。〔a〕それでも、長期の趨勢としては、国境だけでなくそれに伴う主権の絶対性も、弱体化され、形骸化されるだろう。そしてその代わりに、国連のもとにあつてさまざまな分野で国際的な調整活動を行なってきた専門諸機関（世界保健機関、国際原子力機関、国際民間航空機関、世界気象機関、等々）のようなものが、世界中にいつそう数多く張り巡らされるようになるだろう。

つまり、本格化した〈情報ネットワーク社会〉では、家族や

## II

、つまり家庭や会社とともに国民国家も風穴が開けら

れ、非実体化されるだろう。そして、それよりもっと機能的なさまざまな柔軟な組織のネットワークによって、その働きがダイタイされるだろう。ということは、ここにおいても、先に述べた底力のある自立した個人、人間的に魅力ある個人の働きに期待されるところが多くなる、ということである。

b、組織や企業や職場が必要でなくなるわけではなく、それらは、積極的にそのような個人を育て、成長させる拠点あるいは場所になることが求められるだろう。

先に私は、二一世紀はすぐれて人間と情報機械との III の時代になるだろう、と言った。ここで次に生ずる問題は、情報機械が、とくに情報ネットワークがもはや人間の外部のものではなくなることである。それは外部化された脳として、人間の脳の働きと交差・浸透しつつ働き、それに伴って人間も機械も変質するだろう。

簡単にいって機械の働きは、人間の身体の延長としてものをつくり出すことにあるが、力学機械によって物をつくり出すのと情報機械によって情報をつくり出すのでは、明らかに段階が異なっている。後者においては、ものをつくり出す能力と言語能力とが著しく近づいていることである。このことは情報処理技術の在り様を長い射程で、とくに社会的な応用との関係で考える場合に、大きな意味を持つてくる。

c、ここでいう言語とは、明示的な記号作用を担う機能的なものにとどまらないからである。言語のうちには無意識や身体性が保存されており、それらが、人間活動の基礎をなすコモンセンスや思い(志向性)やパトス(感受性)を支えているからである。

(中村雄二郎『中村雄二郎著作集第二期Ⅳ』による)

(注)

\*デマゴグ：扇動政治家、民衆扇動家。

問一 傍線部「それは、少しも情報ネットワーク社会を独立させてとらえる障害にはならない」と筆者が考える理由として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 11。

① 工業社会と情報ネットワーク社会は、連合性皮質系の脳機能が、大脳周縁系の脳機能を圧倒した社会である点には変わらないから。

② 情報ネットワーク社会とは異なり、工業社会では、大脳周縁系の脳機能の一部のみが機械に搭載されていたに過ぎないから。

③ 工業社会では、大脳周縁系の機能よりも連合皮質系の機能が優位であるのに対して、情報ネットワーク社会では、むしろ大脳周縁系の機能が優位であるという違いがあるから。

④ 工業社会と情報化社会との間には連続的でなめらかな発展段階が認められるのに対して、情報化社会と情報ネットワーク社会は、全く次元の異なる社会であり、なめらかな連続性が見出しがたいから。

⑤ 工業社会では、大脳の機能のほとんどが人間の脳そのものとして働いていたのに対して、情報ネットワーク社会では、大脳の多様な機能が情報機械として外化されるようになってきたという違いがあるから。

問二 空欄 A と B に入る語の組み合わせとして最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解

答欄番号は 12。

- |   |   |      |   |      |
|---|---|------|---|------|
| ① | A | 社会主義 | B | 資本主義 |
| ② | A | 独裁主義 | B | 民主主義 |
| ③ | A | 集団主義 | B | 個人主義 |
| ④ | A | 神秘主義 | B | 合理主義 |
| ⑤ | A | 年功主義 | B | 成果主義 |

問三 空欄

I

に入る文として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 13。

- ① 先進工業国と開発途上国とで情報の格差が広がり、世界情勢がより一層不安定になるおそれがある。
- ② 情報媒体の多様化に伴い、情報経路が拡大し、情報通信網に大きな不具合が生じるおそれがある。
- ③ あらゆるシステムは一種の制度として惰性化し、人間あるいは個人を拘束してくるおそれがある。
- ④ コンピューターウイルスの感染や不正なアクセスによつて、大量の個人情報漏えいのおそれがある。
- ⑤ 高度情報化社会の中で情報通信機器になじめず、大きな不利益を被る情報弱者を大量に生むおそれがある。

問四 空欄

A

I

ウ

エ

に入る語の組み合わせとして最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 14。

- ① A 自然社会                    I 農業社会                    ウ 情報ネットワーク社会                    エ 情報化社会
- ② A 自然社会                    I 工業社会                    ウ ポスト工業社会                    エ 情報化社会
- ③ A 自然社会                    I 農業社会                    ウ 工業社会                    エ 情報ネットワーク社会
- ④ A 農業社会                    I 工業社会                    ウ 情報化社会                    エ 情報ネットワーク社会
- ⑤ A 農業社会                    I 産業社会                    ウ 工業社会                    エ ポスト工業社会

問五 空欄

a

b

c

に入る語の組み合わせとして最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 15。

- ① a だが                            b じつは                            c というのは
- ② a しかも                          b しかし                            c それは
- ③ a むしろ                          b ところが                          c けれども
- ④ a とはいえ                        b まして                            c たしかに
- ⑤ a しかし                            b だからといって                    c なぜなら

問六 空欄Ⅱに入る語として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は16。

- ① 血縁共同体
- ② 地域共同体
- ③ 職能共同体
- ④ 専門諸機関
- ⑤ 主権国家

問七 傍線部2「ダイタイ」の片仮名を漢字にせよ。解答用紙(その2)を使用。

問八 傍線部3「底力のある自立した個人」とほぼ同様の意味を表す二十字以内の表現を、傍線部3より前の本文中から探し、その冒頭と末尾の四文字を記せ。解答用紙(その2)を使用。

問九 空欄Ⅲに入る語として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は17。

- ① 共生
- ② 統合
- ③ 対立
- ④ 創生
- ⑤ 繁栄

問十 本文の内容と合致しないものを次の①～⑤から一つ選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は18。

① 情報ネットワーク社会においては、外部化された脳としての情報機械と、人間の脳とが相互に作用し合い、機械と人間の両方が変質する可能性がある。

② 本格化した情報ネットワーク社会においては、家庭や職場といった社会組織は、形骸化、ないしは非実体化されるため、それらの社会組織は不要となり、底力のある自立した個人の存在こそが重要となる。

③ 情報ネットワーク社会においては、それ以前の段階の社会に比べ、身体的な力や強さはさほど重要な意味を持たなくなるため、身体障害者や高齢者などのハンディキャップは大幅に軽減されるだろう。

④ 情報ネットワーク社会においては、個々人と会社や地域との関係が大きく変容し、また、自分が属する会社や地域を超えて、他の会社や地域との関係を容易に築くことができるだろう。

⑤ 情報ネットワーク社会においては、論理的思考や意思決定を司る連合性皮質系の脳機能のみならず、本能や情動を司る大脳周縁系の脳機能までもが情報機械として外化されるようになる。

















